

(論文内容の要旨)

学籍番号 1321912 中澤瑞季

本論文では、建築の内部空間の中で生まれる、木材を主な素材とした筆者の彫刻制作の変遷を追いつつ、その構築性について特質を明らかにしていく。物質世界において彫刻表現をする際の表現の由来は、作者のイメージ世界だけではなく、素材や環境に大きく影響を受けるものである。私の彫刻はほぼすべて、建築空間の矩形の中で生まれる。自然界の中ではほぼ見かけない、水平、垂直のラインに囲まれた建築から引用する彫刻の見方は、作品の中に作る水平垂直の木の構造によって、生まれてくる像を透かしながら作品に反映されている。

建築の内部空間を彫刻に介入させていくと感じる彫刻が透けていくような感覚は、物理的な体積とは関係ない彫刻独自の空間性を生じさせる。このような、現実空間を扱う彫刻ならではの表現の奥行きや視覚的な効果を、どのように選択して操作するに至ったかを、自作に追随する形で論じていく。

第1章では、構築という人間の根源的な営みについて着目し、私の制作においてその営みがどのような意味を持つかを自身の経験を踏まえながら考察する。彫刻に付随するものである支持体自体が、イメージを現実空間に固定するために重要な要素であるため、自身の制作では作品と台座の分別をはっきりさせていない。制作で使用する主な素材である木材の特性について考察しながら、イメージとイメージを支える支持体をどのような視点で捉え、如何にして互いがより密接に関わる表現をするに至ったかを説明する。

第2章では、三次元的な表現と二次元的な表現の移り変わり、現実と非現実、イメージを現実空間に固定するための構造体を板材により彫刻内部に侵入させたことで生じる板材と丸太の境界、等の自身の作品に関わる様々な境界を、過去作を提示しながらその不確かな特性について論じていく。必要なものであるが、信用することが出来ないという私の境界への視点を解説し、制作時に常に意識している、イメージや視点の往来の根拠を提示する。

第3章では、垂直性が作品内部に組み込まれることによって生まれる「彫刻の透明性」について、コーリン・ロウの「虚の透明性」の理論を参照しながら自身の作品と比較しつつ考察する。また、絵画などの二次元的な表現では遠近法などにより三次元の、「実」ではない実在性を鑑賞者に感じさせる現象性がみられる場合が多くあるが、このような現象的な空間認識は彫刻の鑑賞においても生じ、その空間認識により彫刻には「実」の空間ではない「現象的な空間」が生まれる。その空間の現象性が実在する彫刻を絶対的な三次元的な側面から切り離すことが出来る表現となることを、自作と関連付けつつ論じる。また彫刻の空間には物体として見る事が出来る顕在部分に連なる、非物質的に潜在する側面もある。その空間を筆者は 彫刻内部に潜む「潜在空間」と呼び、この非物質的な空間の性質について、切り取られた枝を元に考察する。「潜在空間」は彫刻の材料として使用している木材からも感じ取ることが出来る。

第4章ではアンリ・フォションの空間の中の彫刻に対する二つの区別「限定・空間」「環境・空間」を使って、自身の彫刻の周囲の空間への作用がどのように変化したのかを考察する。第3章

では彫刻の透明性による環境とのつながり、現象的な空間、潜在空間等、彫刻を物質的な要素にとらわれずに論じてきたが、ここでは人工毛や紙等の異素材を使用して、イメージと物質を組み合わせることによって生まれる環境と彫刻とのつながりに焦点を当てる。また、実際の展示においては制作時と異なる造形感覚が生まれることを、今年度 10 月の展示と博士審査展での展示を比較しながら考察する。

最後に、私の作品の構築性は、制作のプロセスそのものが組み込まれた構築性であり、何かが起こったことに対して即時的に生まれる構築性であった。そして、生まれてくる構築性それ自体に、彫刻を作ることの目的を感じとることが出来る。